

はずだ。都には住むところのない人たちがあ
 ふれているに違いない。雨露や寒さをしのぐ
 場所ならば、大勢の人であふれているだろう
 普通、そういうところに行かないか？
 思いつきりな屁理屈だが、妙に説得力を感
 じてしまった。
 「その他大勢の浮浪者は、下人と老婆をクロ
 ーズアップするため、ストーリーの展開上無
 視したのは譲ろうとしよう。でも、死体がご
 ろごろ転がる羅生門という空間に足を運ぶこ
 と自体理解できない。当時は物の怪とか悪霊
 とかに対して、恐れのような思想があったは
 ずだ。だから、安倍晴明が今に語り継がれて
 いるんじゃないか」
 今日父は、なんだかいつもと違う。理屈
 にもならない理屈だが、ふだん文学に興味を
 示さない父がここまで語るとは予想だにしな
 かった。よほど『羅生門』には、イヤな思い
 をさせられたのだろうか。それとも何かトラ
 ウマになっっているに違いない、そう思わせる

熱の入れようだ。
 「自分も、死体がごろごろと転がる羅生門に、
 入っていくこと自体、どうしてなんだろうつ
 て、納得できないけど……」
 「そう思うだろう。そして、羅生門に入って
 いた謎が、最後まで読んでも解けなかったん
 だろ？ オレも何度読んでも分からなかった
 んだ」
 きっぱりとそう言い放った。
 「でもな、分からないから、学者が人生を賭
 けて、『羅生門』を研究するんじゃないか」
 話は急展開だ。いきなり学者の登場だ。
 「答えが出ないから、学者たちはいままでに研
 究を続けているんだよ。それを、十七年しか
 生きていないおまえが、一度や二度、しかも
 いやいや読んだくらいで、理解できるはずな
 いだろ？ それを分かった振りしてあれこれ
 感想を書くなんて、凶々しいにもほどがある
 そう思わないか？」
 「それはそうだけど……でも宿題として

『羅生門』の感想文が出されているんだよ」
 「分からなければ分からないでいい。そう素
 直に書けばいいんだ」
 そして続けた。
 「来年、再来年、また読み返したときに、今
 年読んだときには気づかなかったことに気が
 つけばいいんだ。今年感じることができな
 かったことを、来年感じられるようになれば
 い、それが成長というものだ。分かった振り
 なんかしなくていいもってもらいたいことを
 言っている文献を、自分の感想のように書き
 写す必要もない」
 父の話はむちゃくちゃだ。だが、分からな
 いことは分からないと素直に認める、その態
 度はなんだかすがすがしく思える。自分の子
 どもの前で、分からないと断言するのはよほ
 ど勇氣のある行動だとも思う。なかなかでき
 ることではない。
 8月31日がきた。高校二年生の夏が終わつ
 た。『羅生門』に対する自分の答えは見つか

敗北の二文字を味わうことになるのだろうか。
 ているだろうか。それとも今年と同じように、
 は『羅生門』から何を感じ取れるようになったか。
 生門』を読み返してみたい。そのとき、自分
 だが、来年、そして再来年、もう一度『羅
 まれている。
 のめされた気持ちというか、後味の悪さに包
 門』であったが、今は敗北感というか、打ち
 宿題だからと、仕方なしに読んだ『羅生
 たしの実力なのだ」と認めざるを得ない。
 『羅生門』の何も理解できなかった。今のわ
 が心の中でリフレインしている。
 「なぜ：：」「どうして：：」「そればかり
 っかけになることを考えなかったのか：：。
 な発言をしたのか、自分が暴力をふるわれき
 なぜ、体力のある若者に対して挑発するよう
 一人ひとりの素性を知っているのか。老婆は
 体から髪を抜いている老婆は、どうして死人
 なぜ下人は羅生門に入っていたのか。死
 らなかった。